

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02250

研究課題名(和文)アレクサンドル・チェレプニンの中国と日本における活動及び作品への影響の再検討

研究課題名(英文) Reconsidering Alexander Tcherepnin's musical activities in China and Japan as well as their influences on his musical output

研究代表者

高久 暁 (Takaku, Satoru)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：20328769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1934年から1937年にかけて中国と日本に滞在して創作・演奏・教育・楽譜出版の各活動を行い、両国の音楽界に刺激と影響を与えたロシア出身の作曲家・ピアニスト、アレクサンドル・チェレプニンの活動の実態と、日中両国の音楽文化が作品に与えた影響を、スイス・バーゼルにあるパウル・ザッハー財団所蔵のチェレプニンのアーカイヴにおける一次資料の調査を中心に、日本、台湾、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシアのアーカイヴや図書館での調査を介して解明するものである。この方法論による研究は初めて実施されるものであり、調査の結果、従来のチェレプニン研究では知られていなかった多くの知見や資料を見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によってチェレプニンが1934年から1937年にかけて中国と日本で行った音楽活動について多くの新たな知見と資料が発見され、当該期の日中両国の音楽史をより精密に理解することができるようになった。特にチェレプニンが当時の日本の音楽界や、伊福部昭や江文也などの「チェレプニン・コレクション」から出版された作曲家たちや作品について論じた未出版の論文を執筆から80年余を経て刊行したことによって、チェレプニンへの認識に新たな次元がもたらされた。さらにチェレプニン作品における日中の音楽文化の影響と、「チェレプニン・コレクション」の出版の実態が2つの時期に区分できることが判明した。

研究成果の概要(英文)：The study is focused on "reconsidering" Russian imigrated composer-pianist Alexander Tcherepnin's musical activities in China and Japan from 1934 until 1937 as well as their influences on his musical output, based on the intensive researches of the archive of the Tcherepnin Family, located in Paul Sacher Foundation in Basel, Switzerland, and other public or private archives and libraries in Japan, Taiwan, Germany, France, the U.S. and Russia. On investigation the researcher discovered considerable amount of new and unknown information and significant documents, all of which made possible a much more detailed and accurate chronology of Tcherepnin's activities in East Asian countries, and a by far more comprehensive evaluation of his musical works inspired from the musics and musical cultures in China and Japan. The researcher assures that the result of the research, overall, has brought the Tcherepnin studies into a new light and dimension.

研究分野：音楽学

キーワード：アレクサンドル・チェレプニン 20世紀日本音楽史 20世紀中国音楽史 ロシア・ソビエト音楽史 楽譜出版史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ロシア出身の作曲家・ピアニスト、アレクサンドル・チェレプニン(Alexander Tcherepnin, 1899-1977)は、1934年から1937年にかけて中国と日本に滞在して演奏・教育・創作活動を行った。両国でチェレプニンは作曲コンクールを主宰、入賞した当時の若手作曲家たち他の作品を「Collection Alexandre Tcherepnine」(通称「チェレプニン楽譜」「チェレプニン・コレクション」、以下CATと略記)の名の下で出版、両国の音楽界にユニークな刺激と影響を与えた。この事績を中心として従来から日中両国においてさまざまにチェレプニン研究が行われてきた。

しかし多くの研究に方法論上の問題が存在した。最大の問題点は、スイス・バーゼルにあるパウル・ザッハー財団にチェレプニンのアーカイヴが存在するにもかかわらず、アーカイヴ所蔵の資料に基づく研究がほとんど行われてこなかったことである。筆者以前にアーカイヴ調査に基づく研究を行った唯一の研究者である王文も、中国におけるチェレプニンの音楽教育面での寄与を研究主題とした(注1)ため、日中両国におけるチェレプニンの音楽活動の全体像と、チェレプニンの作品への影響をアーカイヴ資料に基づいて検討する研究は未実施同然の状況だった。

筆者は2013年までにベルリン国立図書館音楽部門でCATの出版番号40(A.T.40)を持つ伊福部昭作曲《盆踊りパレット》の楽譜を発見したが、この楽譜は従来のチェレプニン研究やCAT研究では知られていなかったものであり、作品も伊福部昭の作品表に長らく掲載されていたが実態不明とされていた。そのためこの作品は2014年の伊福部昭生誕100年の記念年に筆者所蔵の楽譜によって録音され、CDがリリースされた(注2)。以上の経緯から、筆者は日中の研究者による既存のチェレプニン関連の研究に根本的な疑義を持たざるを得なくなった。

筆者は20世紀音楽の研究者としてチェレプニンの音楽活動に従来から関心を抱いてきたが、科研費を得たニコライ・メトネル Nikolai Medtner の研究(注3)など20世紀の亡命移住ロシア人音楽家の研究に経験を有し、2000年以降中華圏のピアノ文化を中心とする音楽事情に関心をもち、中華圏における西洋音楽様式の音楽の創作、音楽家、音楽教育制度や音楽コンクール等の歴史と現状について研究とフィールドワークを重ねてきた。これらの経験を踏まえて筆者は従来の研究者には行うことのできなかったチェレプニン研究が実施可能であると考えた。

2014年8月に筆者は初めてザッハー財団のチェレプニンのアーカイヴで調査を開始した。当初は研究の焦点をCATの出版プロセスの解明に当て、チェレプニン自身の残したCATに関する資料に加えて、従来存在の知られていなかった伊福部昭、松平頼則、清瀬保二、江文也、萩原利次、劉雪庵などCATから作品を出版してチェレプニンに師事・交際した作曲家たち、音楽評論家の三浦淳史、龍吟社音楽事務所でCATの編集・出版に携わった音楽学者・音楽評論家・声楽家の湯浅永年らがチェレプニンに宛てた書簡を主に参照してCATの出版事業の解明に努め、研究成果として、学会発表(高久2015b)(Takaku 2015)、論文(高久2015a)(高久2017)を公表した。研究の過程で、チェレプニンの最初の妻ルイジーン・ピータース・ウィークス Louise Peters Weekes が残した日記帳が、日中両国におけるチェレプニンの音楽活動の傍証として重要な意義を持つ資料であることが判明し、(高久2017)において初めて言及した。

### 2. 研究の目的

アレクサンドル・チェレプニンの中国と日本における音楽活動と作品への影響を、チェレプニン及びルイジーン・ピータース・ウィークスの残した一次資料によって、広範な視座のもとで解明する。より具体的な研究目的として、

- (1)チェレプニンの刊行した楽譜叢書「Collection Alexandre Tcherepnine (CAT)」の出版と流通の実態を解明し、CATのカatalog・レゾネを日英二か国語で作成する。
- (2)チェレプニンの中国と日本における音楽活動の再検討
- (3)チェレプニンの創作における日本音楽と中国音楽の影響の分析的解明、の3点を挙げた。

### 3. 研究の方法

複数のアーカイヴ・図書館における資料調査に基づく。

#### 2(1)については、

チェレプニンのアーカイヴに所蔵されたCAT関係の一次資料を網羅的に調査する。

CATを多数所蔵する外国の図書館や個人蔵の楽譜コレクションにアクセスして資料の現物を見出し、CATの流通経路を解明する。

研究期間中に内外の古楽譜市場に現れたCATを可能な限り実見・購入し、その流通経路を調査する。

#### 2(2)については、

チェレプニンのアーカイヴの所蔵資料とルイジーンの日記を調べ、両国でのチェレプニン夫妻の正確な行動歴を解明する。

チェレプニンが日中両国で行った音楽活動に関連する一次資料を網羅的に調査する。

チェレプニンが日中両国で行った音楽活動に触発されて執筆された論文を網羅的に調査する。

#### 2(3)については、

チェレプニンのアーカイヴに所蔵されている、日本・中国の音楽や両国での音楽活動から影響を受けて作曲されたと考えられる作品すべての資料を調査し、チェレプニンの作品における日本音楽と中国音楽の影響を分析的に解明する。また、チェレプニンが両国で音楽活動を行った時期(1934~1937年)に作曲された作品すべてについての資料調査を行う。

### 4. 研究成果

- (1)CATの出版と流通の実態

## 出版の実態

CATは東京・赤坂区田町（現在の港区赤坂）に社屋を持った出版社「龍吟社」の一部門「龍吟社音楽事務所」から出版された。最初の刊行物（賀緑汀《牧童之笛》A.T.1）が出版された1935年4月20日から最終刊行物（小船幸次郎《随想曲 第一 第二》A.T.38）が出版された1940年4月6日までの5年間の間に、出版番号にして40点、38冊の楽譜が出版された（パート譜を含まない）。チェレブニンは龍吟社音楽事務所を「自分の出版社」と見なした。チェレブニンの自叙伝草稿の記述によれば、CATの出版に関わる経費はチェレブニンのピアニストとしての演奏活動や作曲料や自作品の出版収入など音楽家としての活動から得た収益で賄われ、資産家だったルイジーンからの経済的支援を受けたものではなかった。

5年間の出版事業は、チェレブニンが日中両国での音楽活動を終えてアメリカへと戻った1937年3月を境界に二つの時期に区分できる。1935年4月から1937年3月までの「第1期」は、チェレブニンの直接の指導下で行われた。アーカイヴに残されたCATに関するデータ（コピストの名前、作曲者への報酬額、出版部数他）と作曲者とチェレブニンが交わした出版契約書は、ほぼこの時期までに出版された楽譜のものに限られている。

CATの出版事業を支えたのが、チェレブニンの日本滞在中に通訳や相談役やスポークスマンの役割を務めた湯浅永年だった。湯浅は龍吟社音楽事務所の囑託としてCATの制作・出版に従事し、作曲者とチェレブニンがCATの出版契約を行うときに証人としてしばしば立ち会った。資料は発見できなかったが、1937年3月にチェレブニンが東アジアから去ったとき、以後のCATの出版予定や出版番号はチェレブニンと湯浅との間でおおむね合意が形成されていたことが想定できる。このことは、チェレブニンが1937年末から1938年初頭にかけてウィーンのユニヴェルザル・エディツィオン社（Universal Edition）に委託して楽譜を出版した伊福部昭《盆踊り バレット》がCAT最終の出版番号A.T.40を持ち、1939年3月に出版された江文也《北京萬華集 第1巻》がA.T.39と、出版番号が逆転していることから推測できる。

1937年4月から1940年4月までの「第2期」では、欧米に住んだチェレブニンの指示は後景に退き、湯浅が主にCATの出版事業を差配した。そのため「第2期」の楽譜出版では、例外的なケースを除いて出版に関する諸データが残されていなかった。湯浅は1939年7月28日付のチェレブニンへの手紙で、A.T.39の出版番号が与えられていた江文也《北京萬華集》を「国立北京師範學院叢書」の一冊として出版したことを事後報告のかたちで述べているが、これはチェレブニンと湯浅の信頼関係や、湯浅に与えられていた裁量の大きさを示すものでもある。

CATの出版事業は1940年に終わったが、事業停止に関する資料は見出せなかった。当時パリ郊外で二番目の夫人ミンと生活していたチェレブニンは、日中戦争と第2次世界大戦の勃発によって、CATの出版候補作品となっていた松平頼則《ピアノ協奏曲（南部民謡を主題とするピアノとオルケストラの為の変奏曲）》と劉雪庵《中国組曲》ほかの出版を断念した。また湯浅と龍吟社社長の草村松雄は、出版業界が戦時体制へ傾いたことを理由に龍吟社音楽事務所の存続は不可能と判断、パリと東京で連絡がなされないまま出版事業が中止された可能性もある。《中国組曲》は1948年にパリのFlûte du Pan社から出版されたが、楽譜はチェレブニンの作成した浄書譜であることが判明した。CATはチェレブニンが龍吟社音楽事務所に託した資金を原資として出版されたが、CATの事業を終える際に余剰資金が存在したとすれば、それが同年に出版された荻原利次《セロとピアノのための二つの小品》の出版費用に充当された可能性もある。

## CATの流通の実態

CATの楽譜には奥付が貼付されたものとされていないものが存在する。奥付を直接出版物に印刷せずに「貼る」やり方は、戦後に龍吟社から刊行された楽譜でもしばしば見られるものである。奥付の有無の意味は必ずしも明らかではないが、正規の流通ルートを経て取引された楽譜は、例外なく奥付が貼付されていたと見られる。

CATは東京・龍吟社の店舗、楽譜を扱う全国の音楽小売商、楽譜に印刷された代理店（中国：商務印書館、アメリカ：G.Schirmer、パリ：Pro Musica、ウィーン：Universal）を介して購入できることになっていた。筆者は研究期間までに内外の古楽譜商やベルリン、ミュンヘン、パリ、ワシントンDC、ニューヨーク、ボストン、ロンドン等の図書館で100冊以上のCATを実見したが、SchirmerとUniversalで扱われた楽譜が見出された。この代理店制度は良好に機能したとは思えず、上記以外の海外の音楽小売商が龍吟社に直接注文したと見られる楽譜も発見された。

中国大陸におけるCATの所蔵調査は行うことができなかった。しかし中国大陸でのチェレブニン研究の実情から推測する限り、CATはもともと中国大陸では少数しか流通せず、流通した楽譜も現在までに失われたものが多いと考えられる。台湾でのCATのコレクションは苗栗県苑裡に居住した作曲家郭芝苑（1921～2013）の蔵書以外に確認されなかった。江文也と交流した郭は1945年まで東京に住んだが、その時期にCATを龍吟社の店舗で購入したと考えられる。

フランス国立図書館のCATは、主にナディア・ブーランジェ Nadia Boulanger が寄贈したものである。アーカイヴ所蔵のチェレブニン自筆のCAT寄贈先リストにブーランジェの名が見られ、龍吟社音楽事務所からブーランジェに実際に楽譜が送付されたことが確認できた。

CATはボストンやパリ在住のチェレブニンの遺族も少部数の楽譜しか所持していない。結局CATの多くは、太平洋戦争末期の空襲で龍吟社の倉庫が焼失したときに失われたと考えられる。またチェレブニンの没後、ミンが龍吟社他の日本の音楽関係者とコンタクトを取ってCATの現状を訊ねたが、CATの出版事業の詳細をミンが知らなかったこと、また日本側のいささか不誠実な対応が原因となって問題が解決を見なかったこともアーカイヴ所蔵の書簡から判明した。

## (2) チェレプニンの中国と日本における音楽活動の再検討

### チェレプニンの自伝的資料について

チェレプニンは生涯に自叙伝執筆の試みを4回以上行った。アーカイヴ所蔵の自叙伝の草稿をすべて調査した結果、1899年から1937年までの生涯が扱われたSecond (Personal) Autobiography(注4)と題された草稿に日本と中国での活動が詳細に記述されていることが判明した。この原稿が執筆された際の参照資料としてチェレプニンの日記の存在が想定されるが、アーカイヴには存在しない。自叙伝にはチェレプニンの「ユーラシア主義」が「自分の一部 a part of me」であり、着想の源泉が1930年に読んだゲオルギー・ヴェルナツキーGeorge Vernadskyのユーラシア主義を背景に持つ著作であることが記されている。

ルイジーンの日記帳は1920年代前半から1940年代半ばまでの四半世紀近くの年月が網羅されたものであるが、概して数日から数週間程度の出来事がまとめて記載されている。また、多くの頁にルイジーンが撮影した写真が貼付され、絵葉書やパンフレットや広告等の資料、さらにはチェレプニンが誕生日に贈ったカードや葉書や小曲の自筆譜までもがスクラップされている。ルイジーンの日記帳は1930年代の中国・日本の風俗誌の側面など、チェレプニン研究以外の観点からも独自の価値を持つ資料と考えられ、今後のさらなる研究が待たれるものである。

### チェレプニンの日本及び中国における音楽活動の資料をめぐって

チェレプニンは旧ソビエトの音楽学者グリゴリー・シュネールソンGrigori Shneersonと1965年から1977年まで文通を行い、書簡の中で1930年代に日本と中国で行った活動について述べている。この書簡は一部がコラベリニコヴァの著書(注5)で引用されているが、書簡の全体と文通の全容を調べるために、モスクワの国立グリナカ音楽博物館コンソーシウム所蔵のシュネールソンのアーカイヴ(.375)でチェレプニンの書簡の調査を行った。これらの調査からチェレプニンの旧ソビエト訪問の背景事情や、文通を行っていた時期のチェレプニンが総じてユーラシア主義について積極的な関心を抱いていなかったことが観取された。

### 日中両国で行った音楽活動に触発されてチェレプニンが執筆した論文について

アーカイヴ所蔵の資料の中から、1937年に執筆された日本の音楽事情とCATから出版された作曲家たちと作品について論じた未出版の英語論文が発見された。この論文を軽微な編集の上、翻訳と解題を付して(高久 2018)として刊行した。執筆からおよそ80年を経て初めて刊行されたこの文献は、日本の音楽事情に関するチェレプニンの認識と、CATの作曲家やその作品や音楽様式への評価がチェレプニン自身の言葉で語られている点で画期的な資料である。

また、古代から20世紀前半に至る時期の中国音楽とその文化について扱った未出版のフランス語論文や講演の原稿9編(注6)も見出された。1940年代前半に執筆されたと考えられるこれらの文章は、チェレプニンの中国音楽の認識や関心の方向が示され、十分出版に値するものである。しかし解題を執筆するためには、20世紀前半までのフランスにおける中国音楽や音楽文化についての文献学的研究が必須である。これらの文献が公表されることで、チェレプニンの日中両国の音楽活動のさらなる意義が明らかになるものと思われる。

## (3) チェレプニンの創作における日本音楽と中国音楽の影響の分析的解明

### 時期的区分

1934年から37年にかけて最初の妻ルイジーンと行った日本と中国での「グランド・ツアー」から得られた影響と、1938年以降の中国出身の二番目の妻ミンとの生活から得た影響を分けて考える必要がある。これは従来のチェレプニン研究には存在しなかった視座である。

ここでチェレプニン、ルイジーン、ミンの関係に触れておく。チェレプニンは1934年に中国で音楽活動を開始して間もなくミンと知り合ったため、ミンは最初の妻ルイジーンを知っており、中国でのチェレプニンの音楽活動を間近に接していた。しかしミンは上海からブリュッセルに留学してチェレプニンと結婚したため、日本でのチェレプニンの音楽活動についてはチェレプニンから概要を聞く以外に知る方法がなかった。ミンと再婚したチェレプニンにとって、ルイジーンとの生活は心理的なトラウマを伴うものでもあり、音楽家として積極的に回想を行いたい感情と生活者として思い出したくない感情とが常にせめぎ合っていた。チェレプニンが生涯に自叙伝の執筆を何度も試みては放棄したのも、これら二つの感情の齟齬に根本的な要因があったと考えられる。

### チェレプニンの作曲方法

チェレプニンは概してスケッチや忘備録的な断片からほとんど完成稿に近いレベルの作品を完成させる傾向が認められ、作品に関する一次資料(完成稿レベルの自筆譜、チェレプニンとコピストが作成した浄書譜、スケッチ、メモ的な楽想の断片)の残存状況も作品によってばらつきが大きかった。むしろチェレプニンの自作品解説の草稿に有意義な情報が含まれていた。

### 日本音楽からの影響

アーカイヴ所蔵の楽譜資料を調査した結果、新たな発見があった。《日本の歌 Chanson japonaise》等の自筆譜は、1930年代の日本での音楽活動の影響から作られたものではなく、ナチス占領下のパリで活躍した舞踊家・原田弘夫との交流から作曲されたと見られる。原田が与えた日本音楽(恐らく箏曲)の音源をチェレプニンが採譜したスケッチも発見された。原田弘夫の評伝(注7)によれば、1940年代にパリで原田はチェレプニンの音楽や指揮のもとで公演を行ったとされているが、アーカイヴでは公演に関する記録や資料は見出せなかった。

このことは、従来1930年代の日本での音楽活動と関連して論じられる傾向のあったポール・クローデルの台本によるバレエ音楽《女とその影 La Femme et son ombre》op.79(1948)に新た

な視点を与えるものである。このバレエ音楽の後半はCATから出版された《越天楽》に基いているが、それ以前の部分での歌舞伎の下座音楽を思わせる音楽には、原田弘夫との交流から知った日本音楽から着想を得たと考えられるからである。

#### 中国音楽からの影響

チェレプニンとミンは、第2次世界大戦下のパリで暮らした中国系知識人や中国文化に造詣の深かった中国学者や中国通たちと親しく交際した。この交流を介して1930年代の中国体験とピアニストでもあったミンとの生活から得た生活感情が掘り下げられ、中国音楽や中国文化の諸要素が反映された作品が作曲された。

「幻想曲 Fantasy」と題されたピアノ協奏曲第4番 op.78(1947)に、大戦下のチェレプニンのいわば「第2の中国体験」の反映を見ることができる。第1楽章「東洋の部屋の夢 Eastern chamber dream」の「東洋の部屋」は、チェレプニンが交際したパリ在住の中国通の家の、中国の調度品に彩られた部屋がモデルである。この楽章は『水滸伝』の武松の虎退治を題材とするが、この点に日中戦争期の日本と中国の関係の暗示を読み取ることも可能であるだろう。第2楽章「楊貴妃の愛の犠牲 Yan Kwai Fei's love sacrifice」、民謡に基づく第3楽章「雲南への道 Road to Yunnan」も含めて、チェレプニンの中国音楽や中国文化からの影響は、1930年代にピアノ教育や作曲コンクールを介して中国の新たな芸術音楽の創作の振興を促そうとした経験が昇華された、より成熟した態度を窺うことができる。同様の傾向は《7つの中国の詩に基づく歌曲 7 Songs on Chinese Poems》op.71(1945)、オペラ《ニンフと農夫》op.72(1952)とその原曲のカンタータ《Pan Keou》(1945)、ナレーターとオーケストラのための《失われた笛 The lost flute》op.89(1954)、《7つの中国民謡 7 Chinese folksongs》op.95(1962)にも認められる。

#### (4) 他の研究成果

2019年12月23日から25日にかけて上海音楽学院でチェレプニンの生誕120周年を記念して開催されたアレクサンドル・チェレプニン・ウィークにおける国際研究集会「アレクサンドル・チェレプニンと中国における職業音楽教育 Alexander Tcherepnin and Professional Music Education in China」に招待され、講演を行った。

#### (5) むすびにかえて / 今後の展望

当研究では、チェレプニンのアーカイヴ他の諸施設で従来のチェレプニン研究では顧みられなかった一次資料他の資料調査を行い、1930年代のチェレプニンの日中両国における音楽活動の研究に新たな方法論を提起した。多数の新知見が得られたことは、方法論の有効性が実証されたことを意味する。今後のチェレプニン研究は一次資料の研究が基礎に置かれるべきである。

研究期間の最後に新型コロナウイルスによる感染症が世界的に蔓延したため、モスクワでのチェレプニン文献の最終調査と、ルイジーンの地所だったアメリカ・ニューヨーク州アイスリップでの実地調査を取りやめざるを得なかった。また、2019年4月から10月まで消化器の慢性病に罹患したために研究活動に制約が生じ、研究期間内にCATのカタログ・レゾネを作成することができなかった。これらの調査と成果物の完成は今後の研究で必ず実現させる所存である。

CATに関わる調査では、アーカイヴで何ら資料を見出すことのできなかったチェレプニンと近衛秀麿との関係を、近衛家他の資料で確認することが求められる。CATで最も頻繁に演奏された《越天楽》の楽譜所蔵調査や楽譜テキストの異同調査も行われるべきである。中国大陸におけるCATの所蔵調査も残された課題となった。

また、チェレプニンの未出版の中国音楽に関する論文や講演の原稿は、軽微な編集を付した原文に日本語・中国語訳と解題を付して公表されるべきである。

チェレプニンの遺族の元には、チェレプニンの日記など、今後アーカイヴに寄贈される重要資料が存在するものと考えられる。将来これらが調査されることで、チェレプニン研究がさらなる進展を迎えることは疑いない。

最後に、ここに氏名を挙げることは控えるが、本研究は日本、中国大陸、台湾、アメリカ、スイス、ドイツ、フランス、ロシア等の文書館・図書館スタッフ、音楽家、研究者ほか多くの人々の支援を得て実施された。彼ら一人一人に心から感謝を捧げるものである。

#### (6) 注

注1) 王文「中国と日本でのアレクサンドル・チェレプニンの活動における音楽教育的意義に関する研究」、エリザベト音楽大学博士学位請求論文、2010

注2) CD「伊福部昭 ピアノ作品集」、アルトゥス、ALT208/9、2014年8月10日リリース

注3) 課題番号25370115 2013年度基盤研究(C)ニコライ・メトネルのピアノ・ソナタの批判校訂版楽譜の作成

注4) N4, Second (Personal) Autobiography, (English), 1899-1937

注5) Ludmila Korabel'nikova, *Aleksandr Tcherepnin: Dolgoe Strainstve*, 1999, Moskva

注6) W25, About Chinese Music etc. 個別のタイトルは省略する。

注7) 養道希彦、薔薇色のイストワール、講談社、2004

(高久 2015a) 高久暁、コレクション・アレクサンドル・チェレプニン再考(1)、日本大学芸術学部「芸術学部紀要」第61号、p.69-87、2015年3月

(高久 2015b) 高久暁、コレクション・アレクサンドル・チェレプニン再考、第66回日本音楽学会大会、2015年11月15日、青山学院大学

(Takaku 2015) Satoru Takaku, Travelling Composer-Pianist as Music Publisher, IMS-EA2015, 2015年12月5日、Hong Kong University. (高久 2017)と(高久 2018)は成果報告書を参照。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高久 暁	4. 巻 68
2. 論文標題 アレクサンドル・チェレプニン『日本の音楽に関する論説のスケッチ』本文・翻訳・解題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高久 暁	4. 巻 65
2. 論文標題 コレクション・アレクサンドル・チェレプニン再考（2） 一次資料から見た出版の実態	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高久 暁	4. 巻 273号
2. 論文標題 上海音楽学院で「アレクサンドル・チェレプニン・ウィーク」開催	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モーストリー・クラシック	6. 最初と最後の頁 89-89頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Satoru Takaku
2. 発表標題 Unknown Blooms awaiting Globalization? History of Musicology in Japan in the latter half of the 20th Century
3. 学会等名 Musicology in the Age of (Post)Globalization (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoru Takaku
2. 発表標題 Series of Printed Music as Music Criticism - Alexander Tcherepnin and Collection Alexandre Tcherepnine
3. 学会等名 46th Baltic Musicological Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高久 暁
2. 発表標題 エタ・ハーリヒ=シュナイダーの日本滞在期(1941~1949)の演奏活動をめぐって
3. 学会等名 日本音楽学会第68回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takaku, Satoru
2. 発表標題 Concerts for Life and Survival: Eta Harich-Schneider's concert activities during her sojourn in Japan between 1941 and 1949
3. 学会等名 IMS(International Musicological Society), 20th Quinquennial Congress in Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoru Takaku
2. 発表標題 Publishing Management of Collection Alexandre Tcherepnine
3. 学会等名 Tcherepnin Art Week, Alexander Tcherepnin and Professional Music Education In China (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoru Takaku
2. 発表標題 Musical Culture in Japan and Kuo Chih Yuan
3. 学会等名 重建臺灣音樂史(招待講演)(國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoru Takaku
2. 発表標題 Hsu Tsang Houei's Another "Le Journal musique a Paris"
3. 学会等名 IMS-EA2019(International Musicological Society, East Asia Division)(國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoru Takaku, Tang Zhe, Chi Ho Han, Yuri Didenko
2. 発表標題 Piano Education in the East Asian Countries and Russia
3. 学会等名 2019中国(上海)國際鋼琴教育大会(招待講演)(國際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考